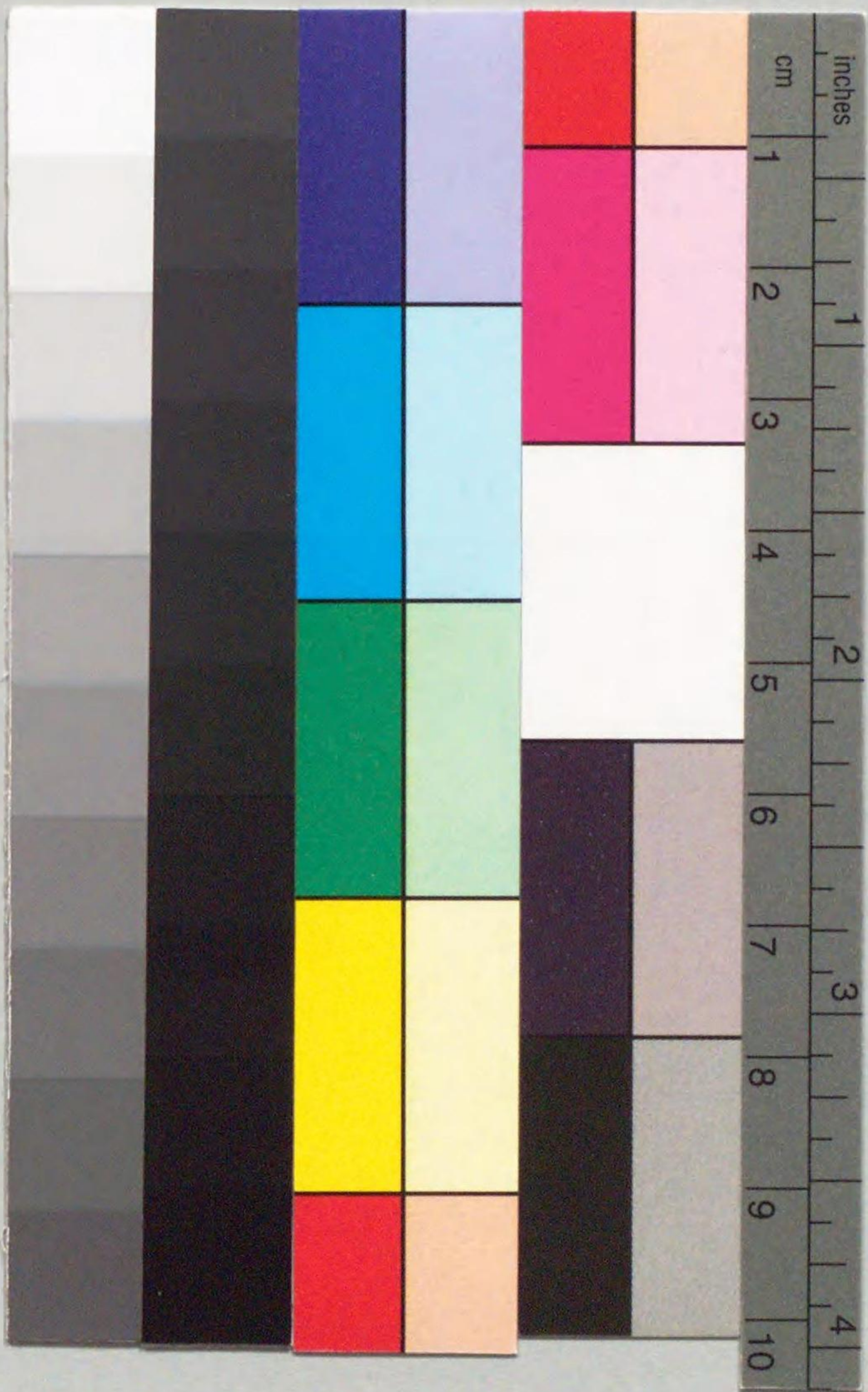


Y994

J2918

上官餘光

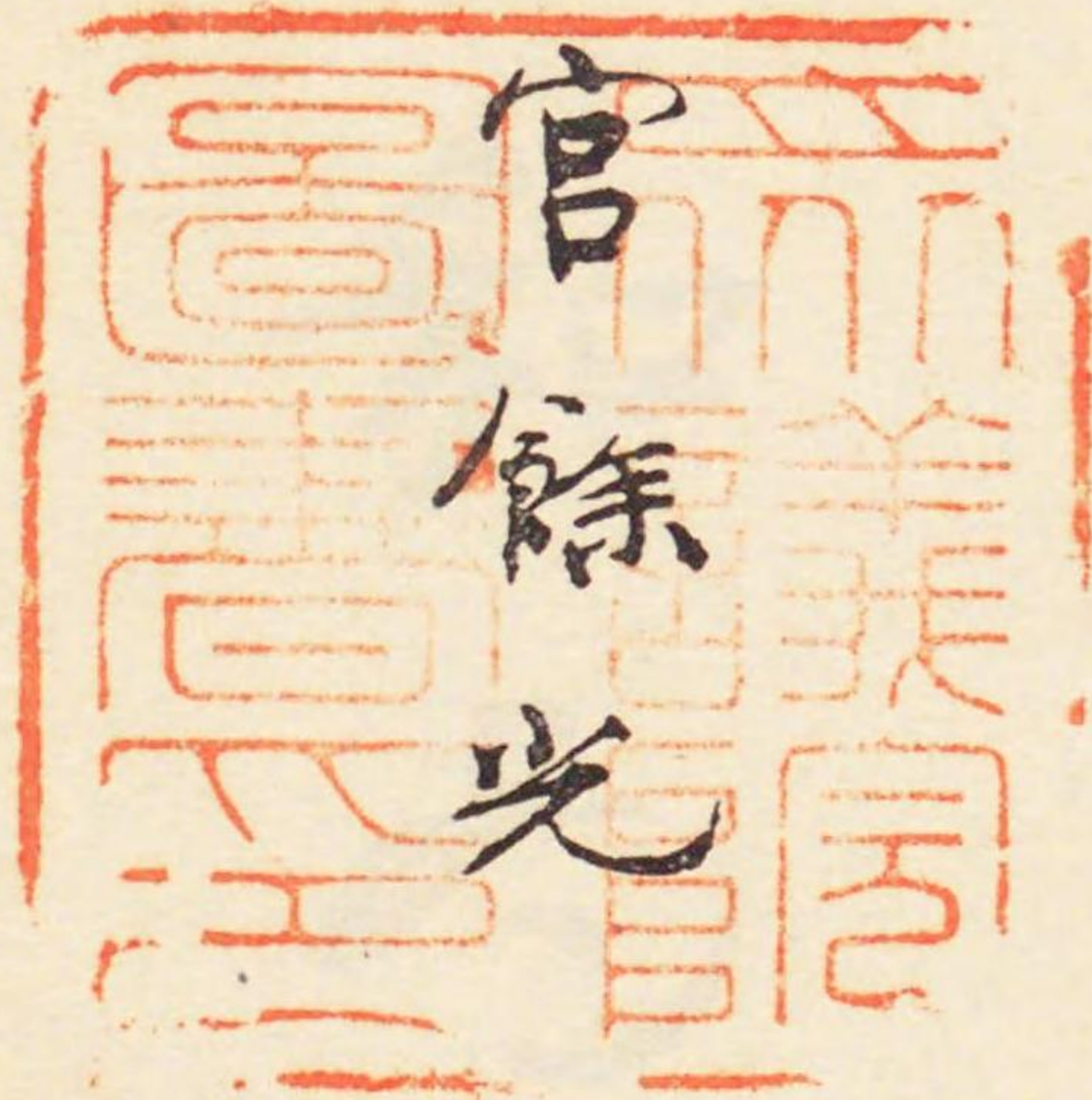
姊
琴
石
活



Y994

J2918

上



姊
壽
正
治

以和為貴

太子御筆集字
原形二倍大



I 種
W



1200701118954

引

昭和八年正月、宮中御講書始の儀に洋書進講者控を仰付けられ、十七條憲法外國語譯について進講すべき用意を整ふ。其よりして、憲法の全文を太子の御筆にて拜し得ばやとの感已みがたく、御筆蹟淋漓として今にのこれる法華義疏四卷の寫眞より、必要の文字を集めて、憲法の正文を編せんと努めぬ。義疏にそのまゝ存せざる文字は、他の文字より字畫を集成して補充を試みしも、如何にしても集作し得ざる分少なからず。依て全文を斷念して要文に留め、併せて三經義疏中特に「三寶」と「法」との意義について、太子の御思想を説明すべき要文をも御字によつて集成し、三經義疏抄とし、憲法抄と併せて、御筆集成の上宮太子聖徳王文抄を編成し得たり。而かも前後文字の筆勢聯絡その他不滿も少なからず、時々修訂を重ねて二箇年を経たり、

昭和九年十二月、來年正月の御儀に進講者たるべき内意を拜し、進講の用意と共に文抄の修訂を重ね、元旦に筆を改め起して、十四日に稿を修し得ぬ。其間

我が心の緊張と共に、太子の御遺徳を追慕慶讃するの思、愈よ深く、筆を休めては沈思思慕の情を、我流の三十一字に綴りて百餘首を得しかば、後多少の削除を加へてこの上宮餘光とす、

憲法の外國語譯文并に御筆集成の聖徳王文抄は、先づ御前に進奏せん爲に印刷に附し、僅少の餘分を宮中關係其他に頒ち、その公刊は他日に譲る外なきを遺憾とす。依て茲には、上宮餘光のみを印刷して知人に頒ち、今回の身に餘る光榮の記念とす。此の遺光餘映が、人を誘つて上宮の本光に接せしむるの緒とならば、本懐此に過ぎず、又聖太子に對し奉る報恩の微衷にも副はんか。太子の深遠雄大なる御思想の全貌と、其の後代につゞける發達とについては、願はくば餘生の力を之に捧げて、世に問ふ時あるを期せしめよ、

昭和十年正月

姊崎 正治

昭和十五年正月増訂

上宮餘光

十七條憲法

第一條

やはらぎは天地のみち人の世も
むつびてわぎのすすみこそすれ

人は皆あめがしたには住みながら

こころおほぞらになごかよはざる

大空のひかりはへだてなきものを

山かげ木かげへだてがほにも

田のくろはわけても水のながれきて
 やまだぬま田に稻のおひたつ
 草に木に花はいろいろことなれど
 にほふはおなじひかりをうけて
 根は土に花はみそらとわかれても
 おなじいのちのかよふあめつち

第二條

人の世に三つの寶をたれましし
 つきせぬめぐみあふぎをろがめ
 鳥けもの虫うじまでも人ごとも
 いのちをうけてあふぐみひかり

みほとけののりの光に國たみの
 よろづも一つこころてりはゆ
 國に君世にはほとけのましませば
 日てらすごどくひかりくまなき
 とことはの法のいのちを身にしめて
 のりを知らするひじりをろがめ
 人の世にのりの光をはなちてぞ
 とこやみてらすみほとけを見よ
 天地のながれも遠きみなかみは
 たへのみのりのいづみつきせず
 國ののり天地ののり人ののり
 かはらぬのりをわが法とせよ

國のさが法のひかりにてりはえて
民のこころのやみははれなん
國の根に道のいのちをつちかへば
たみのこころにのりの花さく
すめろぎのみいつをあふぐ國たみの
こころひとつにのりの道ふめ
みほとけの法のいのちの末ひろく
僧伽和合のたみはさかえん
みちしるべ三つの寶をあふぎてぞ
まことの道をあゆみふみてん
心から道ふみまよふ人はあらし
たよりのしるべ見うしなへばこそ

第三條

大君のみことを法とあふぎてぞ
民のふむ道ひらけゆくなる
朝日かげ峯のはそむるあけぼのに
森のこかげの鳥うたひそむ
春ははな秋にはこのみ天地の
めぐるついでを人もおはまし
君と民あめとつちとのなからひに
かなひて國のいのちさかゆく
のりの道そむくやからのおのづから
ほろぶるままに世はやみならず

第四條

上と下ならひただしくととのへば
國をさまりて民のやすかる

天つちのうごきおのづとわき雲の

うへにまき雲そらにあやあり

第五條

豊聰耳たみのうつたへきこしめし

あきらめさばけとみこののります

訴へはなくとも民のこころくみ

しろししみこのみをしへあふげ

第六條

よしあしをわけてふむ道みさだめん

ひかりとやみをわかち見るごと

おもねりつまことをかくす心ねの

やみをばはらへ法のひかりに

第七條

おのがじしつとめの道をまもるこそ

ひじりの法をしるこころなれ

おのづからかがやく石は世にあらじ

みがきて人もひかりはえなん

第八條

つかさびと國のつとめを朝な夕な

日のいで入るに似てぞつとめよ

第九條

あめつちの法に心のそひてこそ

まさしきまことおひたちはせめ

もろびとの心をむすぶまことにぞ

まごかにめぐる人の世のわざ

小鳥さへいもせのいつもあひつれて

むすぶまことに呼びつうたひつ

第十條

おのがじしさがしと思ふ心にぞ

いかりあらそふ鬼のすむなる

われはよし彼はあししといさかひて

あらそひつきず輪のめぐること

思ひみよおのがひじりにあらぬごと
世の人みなもしれものならじ

第十一條

あめつちのすぐなる法をすぢとして

人をも身をもはかり見まほし

第十二條

民はみな大君のみこもろともに

もとつみ親のみいのちうけて

第十三條

弘き世のつとめを人とともにせよ

おのれひとりわたくしすてて

第十四條

こざかしく己れたのみていきほへば
そねみねたみのつくべくもなき
世にひじり千とせのやみを照らせども
ひかりあふがぬ民のおほかる
ももとせをかさねて法のひかりつぎ
世のやみはらふひじりいでます

第十五條

天地ののりにわたくしなきものを
なにとて人のこころこちたき

第十六條

おのがじし田ばたたがへす民草は
ともにつちかふ國のいのちを
つばくらす雁のゆきかふわかち見て
人の世のわざ時わけてせよ

第十七條

國のわざおほやけごとのおほやけに
法にかなへとみこのらすなり

* * * *

萬善是淨土因

中凡有十七事

維摩義疏上

三經義疏

法華經

花實俱成

法の花ひとの心にさかせてぞ

いのちのこのみ世にゆたかなる

法の花にほふとともに實をむすび

みこのをしへに民さかえけり

萬善一乘

人の世のよろづのわざも法のみち

たごりてひとつひかりをあふげ

我爲法王於法自在

のりの道みたまにしみて大君は

のりのまにまに御代しろしめす

有人醉酒至親友家而臥

ゑひしれて道をもわかぬしれものも

さめては家にかへらざらめや

其心決定知水必近

おもてにはかはける土もつらぬかば

つきぬ泉のわかざらめやは

土のそこわきいづる水もみなもとは

みそらに海にかよひつらなる

おやに親つきぬいのちをたごりては
もとつみおやにあはではつべき
そらのちり濱のいさごもきらめくは
はるけきそらに日のてればこそ
はかりなきいのちの親の法にいき
子はまたおやのいのちをぞつぐ
みほとけをあふぐ心にとことはの
いのちのしるし見えそむるなり
大君のとはのみいのちわけうけて
民のいのちのはてなくぞはゆ

いつまでも父はゐますと思ふまま
子はおこたりてくるひもぞする
くるふ子をいさめてすがたけす父の
のこしくすりかたみとも見よ
なき親をしたふ心はまさしくも
子たるまことのしるしにぞある

時うつり世はかはるともことはの
ひじりのみのりうつろふべしや
いかるがのむかしも今のおほ御代も
ひとつみたまの國のおほのり

現有滅不滅

西にいり東にいづる日のすがた

見ゆる見えぬもひかりかはらず

いかるがの宮居のあかしきえぬとも

あふげ御法のひかりてらすを

世のために法をのこしてさると見えし

みこは今なほゐますここにぞ

在此而説法

上つ宮かみさりまししひじりみこ

まことは今ものりとかすなり

ゆきしあとしたふ心のかよひてぞ

われここにありとるをきくなる

勝鬘經

勝鬘夫人

勝まんの法のちかひをまのあたり

國のいのちに見せましし皇子

小治田に阿踰闍あゆぢやのむかしうつしてぞ

宮ゐにのりのひかりみちぬる

すぐれたる名も玉の緒のつながりて

やまとにたまのめぐみたれけり

一體三寶

國たみを君をさめましみほとけは

法のをしへに世をぞみちびく

君と民こころをあはせ國とのり

いのちひとつに世はまごかなれ

攝受折伏

とりひしぎ悪をこらすもあはれみの

ひじりののりの力なりけり

いつくしみはぐくむ母といましめの

むちうつ父とともこれおや

捨財捨身

たからをも身をもささげよ國の爲

みほとけのため又のりのため

正法萬善

あめつちののりは心ののりにして

世も身も法のすがたなりけり

維摩經

淨名居士

淨名のあとそのままに民のため

きよき御法をたれまししここ

名もきよく心はみそら身は居士の

毘耶離びしゃりのひじりやまどにぞ見る

法の雲たかき心を世のちりに

まじへてひじり民をみちびく

やみひかり民の心をそれぞれに

うつしもいだす國々のさが

けがるるもきよきも國のすがたこそ

民のこころのうつるかげなれ

直心是淨土

もろともになほき心にむすばれて

わざたむけつつきよき國たつ

國きよく民の心のまがらぬは

みちびく法のすぐなればこそ

御前進講

とをに三つももとせをへてかはりなき

のりをみまへにまうすけふかな

上つみや法のみふでをここのへの

宮ゐのおくにささげまゐらす

あまなひのまことの道のおほみこと

かさねてまうす昭和の御代に

慶讃餘録

ひじり宮のりしみことばかしこみて
みこころをあふぐよろこびのほど
國のたま民のこころをてらします
日つぎの御子のみひかりたふと
わが心おほみこころをたがへじと
みたまにいのるわれみそなはせ
上つみや御筆のあとをたごりては
いかるがのむかし今ここに見る
いかるがの御寺のあかししのぶかな
冬によふけにみふでをがみて

みこのみや法のことわりのべましし
みふでのあとにわが心はゆ

この海もよろづの國もやすかれと
ひじりのみこのみぶでをろがむ

(太平洋航海中)

とつくにの人も御光あふがまし
御法のふみの世にひろがりて
とつくにに法のみことばつたへては
しのぶ夢ごのみあかしのまへ

附 録

閑 雲 行

折々の國內紀行

(拔書)

昭和十年一月二十八日、今日は來ぬ、宿願の時遂に來る、天晴れ、冬の空さえて日かげうららかなり、宮中の大任を果し得て感激盡きず、此事別に記す、

御心になほひつるかもけふのはれ

法をみそらにきこえあげけり

すむそらの日かげさやけくいかるがの

むかしのひかりあふぎ見るかな

大君のみまへに身をもわすれけり

むかしののりのみことづてして

宮中を退出して一日靜坐沈思、夜は太子御筆の跡をくりかへす、

みこのみや御筆のあとをくりかへし

おぼえず夜半のかねをききけり

夢殿のよはのみあかしみすがたを

てらししむかししのびてなみだ

身延法主、山川智應君、共に電信にて歌を寄せらる、返事に歌を送る、次の日もすぎ、心もゆるみて走湯に浴しつつ、日夜太子の遺文を拜す、二月三日立春、東海道京都に向ふ、四日朝、京を出でて大和に向ふ、

きりこめてかげにもにたる家いへの

ねむりもさめぬかも川ばた

法隆寺に着す、定胤貫首と相對して、感激暫く言を忘る、貫首は法衣を整へ、一山の大衆と共に、聖靈殿御影の前に誦經、余は特に御筆寫しを奉持して壽量品を讀誦す、

いかるがの皇子のみまへにひれふして

ことばわすれつなみだせききて

てりはゆるみゑいのひかりあふぎては

おもはずまたもかうべたれけり

金堂の中尊を拜して、太子薨去の古をしのぶ、

ありし世のみたけうつしし御佛の

ゑみますみかほくしくたふとき

父君のすがたとも見てみこたちの

いかにみほとけあふぎましけん

中食の饗應にあづかり、午後一山の人々に御講書始の感激を語る、寺を辭して奈良に向ふ、落日の光り平野を照らす、

入日さすこみの小川ゆあふぎ見る

みてらのすがたむかしながらの

奈良に泊し、翌五日、京に入り、先づ桃山御陵を拜し、舊師劉先生を訪ひ、薄暮父母の墓に詣づ、主師親にこの慶を奉告し得ること何の幸ぞ、六日、蒲郡に泊し、七日東に歸る、

二十二日、ラヂオにて太子の御事を語る、未知の人より書信數々、二十八日、伊豆山に泊し、三月一日、身延に詣づ、梅花盛なり、

梅の花みのぶの澤にはひては

むかしの春のしのばるるかな

冬ごもりすごして春を梅のはなに

むかへしみあどけふここに見る

とやまには冬のなごりの見えながら

さはには花のはるをしらせて

空愈よ清く、歸路、落日の富士美はし、

ふじがねの雪になごりのあかねさし

くれゆく日かげをしまるるかな

二日、晴れて海上の日出爽かなり、

朝日子のそらをも水をもあかねそめ

うしほにつれてのぼるさやけさ

久邇宮御別邸に候して太子文抄を獻ず、大妃殿下謁を賜ふ、大宮御在世の昔をしのぶの情に堪えず、又殿下先に十七條憲法を書寫して聖靈殿に納め賜ひしを思ひて、法隆寺貫首に書信す、

* * *

昭和十一年正月二十八日、一年前、御講書始に奉仕せし日なり、

おほけなく雲井のうへにのりのふみ

きこえもあげしこぞのけふの日

かしこくもひじりの皇子のふでのあと
さらにをろがむおもひでのけふ

* * * *

雲 波 行

年毎の海外紀行

(抜書)

昭和十年九月中旬、半晴半曇の天気つづく、時にはアデントンの丘上林間に散策し、時には諸友の來訪を受けてシャアレイ園に遊び、書見筆録の間には孫の成長を見守る、而かも國際世事紛々、心を痛ましむる事多きをいかにせん、

夢のうちにいかるがの宮ほのみえぬ
みくにをおもふたまやかよひし

世のさまをおもへばうたてあふぎみる
みふでのあとにおもひながくも

* * * *

昭和十四年五月初週、(ロンドン)學士院に通ひて會議の準備を整へ、家に歸りては太子の維摩義疏を讀む、佛國品に感特に深く、今年此地にての講演の基礎を得たるを覺ゆ、

十方は佛土なればやふるさとも
ここもおなじきひかりてるなり
十方は佛土ながらもそらあれて
あしゆらのすさぶ今の世のさま

六月卅一日、オクスフォード大學 Rhodes House にて講演、「日本に於ける佛教文化の基本」、三經義疏の一端を述ぶ、

八月三日、ロンドンの日本人會にて聖徳太子を語る、

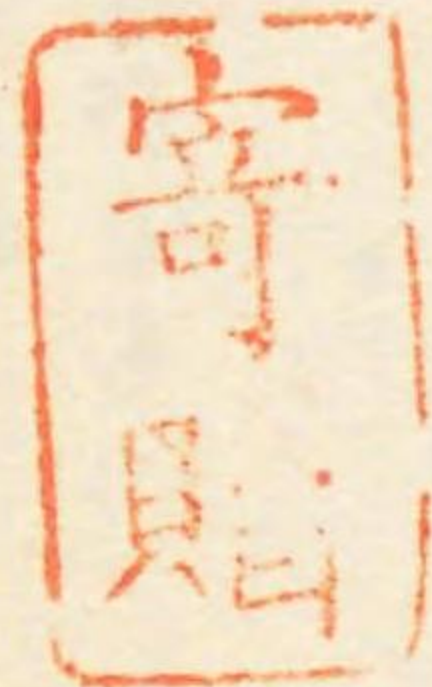
みそなはせおほみこころをまがりなく

世にもしらせんまごころのほど

ロンドンにて尙二回、オランダにて一回講演の豫約、戦亂の爲に果し得ず、空しく歸る、

7238

7



昭和五年三月十日印刷納本
昭和五年三月十五日發行

非賣品

著作人兼

東京市小石川區白山御殿町一七

治

印刷者

東京市麻布區市兵衛町二ノ六一

市

印刷所

東京市麻布區市兵衛町二ノ六一
株式會社

社

ヘラルド

